遠
1450
9

遠
1450
3

寒温奇談一二草第三巻

三　菊原十郎が妻僧の贄に成佛像と成話

欽明天皇治世の十二年。佛法ちんじめて東して我が中國に入。推古女帝たもうに佛を伝じ。聖徳太子殿戸皇子なる伽藍を造る。是より日本深圖の感ぜんに所以のものは吳域より渡る佛像を崇ひてこれ両朝同源なり。後に孝德女帝の時に陸奥の国に文史の徴至まして傳教法師の英僧に朝より。兄弟の僧よ。繰返

四十二章経のこと是古書なり。時に沙門中国の文士 潤色すること
いくばくか見まべ。和漢ともに浮屠の際 抜萃の説あるを事あるふ
べしこれ沙門摩騰天竺の御字 孝明帝の間 永平年中の初めなり
先祖 白小地なれども 仏せ〜 乗りて 高麗よりの 貢画よりのこと心を
乗りて 生涯利を貪らずして 家法男に 義〜一族 信敬 そくもの。
聞よりて 住まんも 面倒なり。よりや 京都にて 我らの心 絵の 六法 法を
学びて 仏方へも 弟を 学ばせ。 おくにつりし 法 浅田宅を 法 都 ありて。
住生し。今年十七にあまるを 如房 えへ 三国の 海の 遊女 ありぬ。
むかへて 妻とする 事 法を 離れ 江 海 より 都 名 あり 遊女の 風
京よりを 磨め 海辺 より 傳 て 学 を 多く。 志賀の 山 越 より 帰 て 日も
若 民 ふ 母 び 住 来 の 人 も 稀 なり。 ま 姫 ひ び そ く も た ど り り 不 よ。 山 寺 の

林乃井より 山 織 牧 十 人 ぞ〜 く と 立 出。 仏 の 冷 訳 も あ く 寄 ほ よ り
十 師 を 捕 へ 衣 被 を 剥 ら ん と 。 十 師 僧 力 の 母 う 方 あ さ 。 優 問 ふ 携 り 合 み
を 授 て 欲 さ ま ぶ る も 哀 の べ こ を 九 祖 よ な 〜 数 〜 ふ 手 擲 し て 杖 の 末 ふ
絶 り 付。 如 房 を 乳 園 く 仏 地 に も 形 く 杖 ふ 。 十 師 幸 ま り て 合 大 助 り
ど も 携 し 経 緯 い 蓋 ひ ら ま 。 家 中 の 素 い こ
宝 の 宝 ぎ り て 且 ま ま 且 い る 元 出 方 あ く 只 一 刃 と 懐 異 裸 の こ 山 中
目 言 て 文 よ 〜 新 ず 。 漸 く 山 ち の 達 仏 の 遠 よ 数 千 の 大 抱 来
て 且 な ん 千 仏 清 い 山 河 傷 の 数 川 し 完 〜 法 塗 の 多 無 を 自 す 八 人 撰
ち よ 〜 く 曲 る 永 異 る 朱 筆 。 同 石 七 八 人 沙 然 を 出 し 。 鞋 及 先 を 揃 て 通 く
沙 今 〜 経 ふ い ら り て 十 師 姉 〜 ま 〜 を 織 ま 草 〜 法 事 を 歌 き 法 り れ ば 。
沙 列 を 言 を 壮 懐 の 内 よ り こ 衣 の 長 老 ま り り り ば み も る 夜 の ま り と 自 上 ま

服の一衣をとびて金にして絡を解とらるゝ人ば。十郎涙を流し大徳の厚き恵
乃在犯をも言ゝべくゝ云ふ世世長老。使過の縁あゝば又ゝを登めと興を忘
げて別れ去ぬ。十郎まゞ和尚。十郎まゞ和尚。山城の雑やあゝ人ゝ空の踏
玉を知ゝ激ゆきゝゝ一個の茅屋有り。示ゝゝと云て連て墨廉をれ入間ふ
言て有の老人出て出を点して廊を入ゝ。十郎を入ゝ為ていふ。迎ゝ給
小の御今ゝ迎人信樹ゝ旅人を追剥ゝゝの西。法ハ彼奴ゝ仇業の
心易き有ゝ中ゝ。先腹を拵て着せ囲炉裏の焔ふゆ中ゝ茶を養
どゝの粥を喫つ。十郎ゝ待ひ旅人本国ハ行国ゝ仁恵ゆゝゝこと
十郎ゝ言ふ拙ゝ行て活ゝる能ゝ。茶本国ハ越前の国府住。氏ハ藤原
名字帰ゝ。先祖由緒もつる来て彷徨ゝの身ゝ成今度大師の育
て都登ゝ待ゝ。乗ふ物語ゝ。倩ゝ人まゝ世ば寿ゝの恵ひゝゝ

一張の弓を架て面有ゝ孔ゝ。書籍数多の揉ゝ。碁ゝ打ゝ。
ゝ用意ゝ。用意の垂作ゝ。人の仏業なゝや。手切ゝ物手ゝ
事を喫ゝ。筆法ゝ。ゝ似ゝ。長ゝ。
手ゝ。紀ゝ石大方ゝ。書ゝ妙ゝ。神業の焔を織ゝん
ゝ。ゝ人打順ゝ。玄ゝ
薮源太ゝ中ゝ。ゝ米ゝ。天西の筆法ゝ。手ゝ昔ハ
久代ゝ。角洲橋ゝ。ゝ立男の
ゝ。年ゝ世ゝ。ゝ
安歌ゝ。ゝ老人ゝ。記出。汐の命を考。栗を炊き酒を進
て堅ゝ。踏費を出。芸ゝ通の一酒箱の身ゝ。後ゝ。
ゝ。ゝ逢ゝ。ゝ角ゝ。ゝ

云れゆべき。実ふ再生の人とうとなるあり。他人を医くことなりかつ。地獄の
報ゆべきやと思て再生を編て嘗をたて。老人更ふ行儀を進めく
いふ。星よりあまくくとちてもの多つ。志なくの御の西年へ出あんつるき方ハ
長寿貴なり。我娘あつぶ事ひよ元年ハ。ものとざろう。十帥も減を咒別ざう
宮都ハ登白川の寺元かの縁有る事を年俗ゆ多を投托ゆるべ式者も
極て貧く。物よ少れく。十帥事ふ。彼産の多く薑繕ゆる夜渡商ハ
身仕をぎ方侵も所。日く鄉法て商四ふ書図を絵し七食ふの料ハ
弟ハ事をれどと賢者千人ゆの侍ふ墨滿を識ゆ。貌を纏て咒ふ
ものちなく。其貧を送て呈ゆ。年来價平く。富の五侵ふ多くゆ。
隆義ふ家を垂き今ハ十一服も殘ゆ。色やせ返角やあ。商しと。
ふ恵百濫一の心潤ゆ。侍ハあるハ冊えていふ。陳来稽て絡を商ハ

大家の物書者を重むあり。書ハ我ハ事をうもあるつ。
のゆ。ゆ。卦星て待郎と見ハの星ハ。ひもハ。刑彼商ハ仕て十帥ゆ。一年を
年りる。ゆの間ハ。法ものゆ事ゆ。ハ同像の年ハ。解て。これを阻泡ハ。
ゆ人十帥ゆ。ハ。ゆ。ハ。艶慢致ゆ。星ハ。ものゆ。ハ。惜ハ。ゆ。ハ。書ハ。
家門ハ合て脇を出ゆ。十帥優ゆ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
郎を出ゆ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
道沢ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ゆ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
二間小三。七日を経て發ゆ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
棺を。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
人。臨終の。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

前よりうりこれば聴衆集会の人々せくだり翻案し香炉峰楼に漂ひ今の代を
寺院繁昌の時ばかりも一沙弥ともなりぬべき者なるべし。
法華の経ふ付て一沙弥を立て時先にたちくる京極の乞人十帛を乞て大きなる笠止り
伴ひく宮よりいろう清美しいろの初発ふ十帛ゞ身の上を飾り柿除汲みのうえ
浴室より指出まへ唇さ有を欲りまべ乞食東海地の車。弱ふ一檀越の侵速さうめ数。
足より十帛法傍より仕て衣食住の仮へ海さ弁事言ふあべ青よ左の色よ
二年海文来る春も踏跪として一日清美の坊を出く岩空しくう僧の浴より引る
為空他よりで見法師此彼ふ居眺いろう。十帛後国の美流を俳徊して手景気を
うるひうふ。山落ふ造り者ろう横樹あり。行の玉も和く横ふ進ふ上まべ横上よ
方便門とふ金榜をかけ幢幡宝蓋を垂。高ふ光彩荘厳ろう金殿あり。中に実
相とふ一扁の額をうてり。いろう美像安坐もゆ。鷲の鼻を開まべ陳の

国宝乃光ふ広ふ女の実姿を十帛怪しこ心ゆるぬるぬる巌窟を使へ切ろう四人町
ぞろろう晴くろうて遊よろろう。探ふ入る国しろうきぞ内の中ろう彼
戸の傍より祝ろう主べ蒙竜中の井実を挑げ。二人の乞ろう女對ひあひて
天日をや覩ぬ面の乞芳ふ世せろふ彩を粉ひ極さうなる丈夫の女ろ死
ありてよろと称をのこ。一人の三十ふ近く。械を翹ろまろるが。呼きいろう
我とそも舟ごとり対ふ吾を難ても死ろんといま乃の一遠ろ者ありふぞ
ありたろく公ぞ。白ふ金剛強を持て。救護を求めべ仏神の冥加を二ひび
無傷の居迎上ふわろ宝ぬるのおりぞ。二人問頼て涙漏ろとくろう
対耳を側く宮居ろう十帛拝ゞ人ゞ慌て
逢人のそでやとふ乗いち弁ふ出の有せろのなろう。今日まで山樵のあろ
をろべ。ろろべもろふ来をろとい人。年長の女変を低し。さそいまゞ

右の様子を去りし夜りのなるべし。然るに寺僧の密旋の様あるにて保ては
此家に来る他人あるは必ず殺害せらるゝこと有り。僧の知らぬうちより立去り
ましといふ十郎去るにても然れば先づ侍は如何なる人にてか有りしぞ
尋ぬれば此の女答へて我は江州志賀の郡荒浪某が女。松枝といふもの也。
幼年より桜皮の家に宿へ出て去る物語の帰るさ道にて盗賊に奪はれ奔ちまろびて
こゝに留りぬ。是まで客人を奥にて殺されまゐらする事その数を知らず。
て後の山に埋め棄つる也。我も中〳〵恥かしながら辰月にまぬかれがたき
苦しき犯をや遂げるならんと彼を都にあてて持ち帰り今金安尾の中よりと
ぞ我は又京極識近家の妻なり。僧徒の手に渡りしとすれば汝の足をも
郷縛し撫で擁してあらぬ振舞をすべし。是非なく辞しの奥に
皆そうてさと既に又年の其せんとする也。寒の如うなる殿様て

此に来りし在無所の判数し。後の山に埋ぬ。君ちや痰去りよひて車の沼江
公に此たに道ぐがくるしことをとひ出でて渡を添して過去るをおく。十郎笑て
横に打ちたる桜も生縁なりしそれにあそこ。因を出しより道人に妻を棄て
老僧に恵まれ薮瀬が書れ布し。五条乃家に住み二年妻の行末を尋ぬるに
までの初より是を語りく。二人大きに驚き縁ある奇遇の様ひ何によ我とふ
法相院は妻の母なるを問ひ金安尾は父が母なるを聞く君が妻なりといふ
示し我妹なり。又我七つの年母を近づき父が去る春雑業して越前の旅宿
宿の妹を奪りしより人間に入りて二条の遠き遊女に街らまし程都の府の人
身を売りて家にて消息して其の末をも知らぬ。其主は金子ありとて我扱に
足ゆるしく。十郎又大に妻の気緒に続き。其妹育て業羅あらばやと
金安尾いふもさり。此寺の長老こそ窟織の張本なれ。二年以前より妻て

出かけ来る。今の錦鶏は好見尼なりとも有らんには、はやく湯あかりて寝所へ入れ
後へ行法の人と共に来りしが、長老の窓を漏る声を挙て泣ければ、痙攣を起し
まして邪業を用ひて、乃ち十郎を下家に縁して、居る中を我等の妹君が妻なりや
と、かの十郎その妹小宰を繋ぐと云ふは、金姿は今到て縁寄りもあらばやと
そうして極械ますらし。本枝を掲あれば、大妙の穴ありて文に随ふ。二人の尼十郎
に喰て身ずしくこそあらめし。伊々し様を掛り下まへは、燈光燦然として白日の如く
大慶の結構は夜からに遊楽の琴曲の美盃盤狼籍たり。金姿も起りて二人踏て奥乃
漂くへて小して出来る長老也。何ほど獲れ析よりは、二人踏て奥乃
一間よりる足と也、怪しく見えきぶる香の煙こもりし、十郎共あさよう
男乃女と見まへるに、忘かるて遇ふる老僧、悍辟の体にて女の乳を
舐り、背にてうけ、熟く睡りいる。女は只嬉と戯れ、ひたひ々と摺よう川ぬし

悪堅こそすぐ四すぐ盈りる。鬢眉の毛は川よりかのるぶこなる眸頭を顕はしてらんとせ
ば、我女房なり。こや長老が志をぎぶなそと我をりとせれく、見れば身を躍らんとせしを。
金姿袂を引き、おまへるる磬を推るべ本堂に通ふ。盆敷て無じる板敷
はじして忽ち大衆ろくに集り来りて、知るてゐるにも異変の使へおまへる、あ家
とふふも小声にて紙より捏りく。かの女房の領をはちつまりる。女房
面を挙て不図とみるとて見まはし、夫十郎なり。といふよりやかかねると早く
と起いでんとするを、十郎が手を震はせかけて、言んとしていれば、声を
内に呑く、僧は志せでとする独僧を四方て押さふる袖を摸るなり。四ツ目を
塞て空し。濁に淀む眼の裏にも般の恨も速て首を掻き。中にあつて窒ね
一つ汁を卸し、茶をとさて枕の上にて突しく。女房その血をさしつらり。そこと
離れて逃ひ来りしまへば、口、虎の尾を踏む地に仏神を念じ漸く

常夜燈

みこもち
ふすま

樓に登り望みおかせける時に岩窟の方に鐘の声を。全く聞く
清玄ハ来るといふ。又木魚の音あり。鏡相又お客も来りしと。慈
振ふに妙覚ハいぐハせんと十郎に継ふて膺を摘て泣倒る。ときに
お客清玄哀しく樓に入十郎が左右の手を把てひき立まより樓の
門戸を鎖し。一の板室の内へ連行くに。此所ハ備に禁獄のごとく構へたり。
清玄ハ更に細索一條と剃刀一挺狀霜一服を与へて云是ハ是れ我ちかれ室の奥之
此式三品の内。いづれにても汝に任せて用ひ。死を遂べし。十郎泣て云
某ハとれちる卑賤顔の君。此を拗て汝をべからん唐突の罪ハ赦し
お客が云我僧が家に密秘云事あり。我寺の秘。密遊を知る者ハ
釈迦守るとも更に許さん。何ぞ況や汝をや。十郎云左ならバ我も又
頼ろくハ剃髪して僧となるべし。清玄云汝今一時の難を逃んため剃髪

せんとハ実の剃にあらず。汝が家に持る仏舎利箱の在を知て盗まん為を
遂ずと更に赦さず。我が不知ありし上ハ遁す殺さんとて十郎が髻を
捉て云哀れ我儂ハ是より師の坊に一寸ひ見へて後死を害あらんべしと。
身を掛く只泣く。お客弟く云汝法会の席より堅く師の坊といへ。
私に大縁を結んずらんや。今ハ汝も頼ても詮なしと。已に短刀を摘に推し
当る時お客がとく押留て。長老板室に入来り。妙覚伝女将附十郎が
死を遂めバ快く体を弄んでハ。是無益なる一寸の酒宴を催して殺に
逝る捗じや。二僧に従て清ふ十郎が命極りぬ。煩悩悲悔さする事
ならずも我が死を宮く埋葬して後世を弔ん。然らバ来世の為ぞと
寛楽を享て生るべしといひ捨て板室の門戸を堅く突閉し。二僧ハ
上に出されぬ。十郎ハ地鞁を踏く憤怒胸を焦し。独を痛も。今ハ自殺

やせんと云ふ声に。忽板の透間より。小鼠の口に一紙を括付て追つれたる
ごとく室の内へ落けり。十郎これを怪しと披きみれバ彼二人の女が手を挽
いぐらうべき手立を細に書認めたり。扨ハ懇くさして扨ハ神明
いまだ捨玉ハぬにやと再三拝する心地し。縄まで解し彼窓を潜りよくて
枷掛に繰の有けて柱を抱。力に任し柱に稍ゆるぐ所あるを幸にして
拷起し。天井の上に入て何方か出る道あらんと。書中に記せる如く
簏宿る所に出て明の光なるに随て行けバ小刀を以て板を毀ち兎を抜て
難なく道ありけれバ月明のごとく。かくいつ共志らねども山深く四五町を
奔りけるに大海に望みて段々降り兎や世の角にようやく辿りて
静て見まハせバ近江の海辺なり。十郎大に喜び海岸に飛び出て。
いそぎ志賀の浦よりいろ〳〵の家の内へ入一別そのこの首尾

士卒まで大に驚き動し。実ニ死ぬ事に思ひし姉妹の娘が向きの
客縁によりて再会すの悦しさよと滅り聞て悦びあへり。十郎云
是れハ醜きに依りて彼が為に悪所を業が援けしとなりて果しく
晴れより出奔して湖上に逃来り。此所に待受て捕ふべき男の
のうまでと云捨て去りぬ。又是乃織匠やしたり右の始終を語りけるは
一家の者皆是を悦び怒して声の歳宝を切り懐を記しとの事を
呼ぶに於て公状を認めて此趣に訴へければ官の司大に怒りて踏海をすすめや
と急ぎ下吏数十人を差遣す間にて遂一不穿鑿究めたるに秘法
世に渡の事のさらして淫乱犯戒の責さるに誅戮せらるゝ。深傍を
遠く搜索して白昼に追捕ひたる。安心堅固の僧侶の横死
せしまでして帰るとぞ。斯て彼の二傍へ告げ渡を濟切りて餘所田乃

濃き事なれば芦葦の間より。十艘あまりの船あらはれ。取囲んで。十郎
船端に洗く立上り大に怒りて罵り叫びしかど。三艘大に打て漕ぎ寄せ
不意をまねて手に擒捕て。十郎を長老にむかひて云。今海賊浪打寄初て我を
飽まで凌ごも。その后こ恙なくて此船を導き恩を思ひ。私が身の乗て
これを赦するなり。疾く陸地へ迷れ隠るべしとて追放つ。二女ハ船底より
出て疾く天へ坐ひ地に伏てうまし。法よ法するゝ理なる事。十郎ハ
二僧を方丈の前に引いだして長老まで私よ赦せし由を申ければ。孰も
待ちよ免許あり。此事嵯峨天帝乃叡聞に達しけるに。上大に逆鱗
あり是非長老を捕へしと。勅命下り。天竺遁れ出でし長老は
美濃の国よりむかへていざこそ。これ盜賊の張本なる。強盗数人捕へらる
常弘仁三年の夏月よ至りて。俗家の男女悉く上に謀叛に徒党縲紲

僧尼のち洗よ入。説法説てのち。居候花の事あり。外ハ僧国
に倣で内ハ却て浄業を汚せ。自今以後。男子は尼寺に入。女人
僧房に入るを堅く禁ふ制せられける。その人の流云は梵嫂
といふ者も婦る。洞なりけん。十郎ハ一時浮世の事を観じて一念ちょ
今そ髪を剃り。五戒に戒を授て法号を寿覚と改む。二女も西
山に行ひ済し事ありとぞあり

寒温奇談一二艸巻之三終

[seal]